

加藤周一、さしあたりの原則主義者

岩津 航

加藤周一の没後、追悼文を公募した『私にとっての加藤周一』（かもがわ出版、2009）に投稿した私は、その小文を「その強靱な精神力と、原則を貫く生き方の高貴さは、私にとってますます尊く、ますます忘れがたいものである」と結んだ。この言い方自体が、じつは加藤が書いた中村真一郎の追悼文を下敷きにしていたのだが、では、加藤が貫いた原則とは何だったのかということについて、当時の私は十分に説明できなかった。それから10年以上経って、加藤の初期著作とフランス文学の関係を中心に論じた『レトリックの戦場——加藤周一とフランス文学』（丸善出版、2021）を執筆し、あらためて加藤の原則について考えたことを、この機会に述べてみたい。

1972年に発表された「私の立場さしあたり」というエッセイがある。「立場」は原則を示すが、そこに「さしあたり」と付けたのは、その原則が変更される余地を残す。言い換えれば、理論と実践のずれを意識していたということだろう。若い頃の加藤は「すべての実践は、理論的に最後まで問題を追求しては間に合わないことがある。しかし、一方では、文学者であるならば、同時に理論的にも最後まで問題を考えて、窮極の回答を用意しなければならない」（座談会「文学と平和への意志」、『人間』1948年8月号）と発言し、文学は現実において実践的に解決できないところまで理論的に突き進むための方法だと示唆していた。文学とは、原則的な思考を状況へ投げ込んだ際に起きる具体的な問題を叙述する手段だった。1940年代後半の加藤は、そのような理性的な文学のモデルをフ

ランス文学に見出した、ということを描著では指摘した。

加藤は一貫して、原則にしたがって生きた人間を評価した。フランスのレジスタンス文学を評価したのは、自由という共通の価値を、共産主義者とカトリックがそれぞれの立場の必然的な論理に則って守ろうとした点にある。日本文学史でも、たとえば河上肇を「意識的な原則にもとづいて生きようとした個人」（「転向または『獄中贅語』の事」、1976）として評価した。加藤がこのように原則的な生き方を尊重する背景には、日本が軍国主義へとなくずしに変化したことへの批判がある。理性的で意識的な個人の生き方は、迎合主義の対極にある。しかし同時に、加藤は原則に殉じる生き方を無条件に賞賛したわけではない。ブラッサンスの歌に曰く、「思想のために死ぬ、それはいい、だがどの思想を？」そこで、人生の原則とするに足る思想を見極めなければならない。

加藤の主な仕事は、さまざまな文学者や思想家の理論的立場を整理し、その整合性と限界を評価することだった。それは一見するとリベラルな相対主義のようだが、加藤は「文化的多元主義の徹底的な立場にはたかない」と宣言した。「価値の相対主義は、個人にとっても社会にとっても、実際に貫徹することの不可能なものだ、と考えるからである。」（「差別の国際化」、1993）何が大事かということは人によって違う、という態度を徹底すると、社会的にはあらゆる価値が等価であるということになる。ところが、その価値観を徹底すれば、他人の原則は自分の原則とは無縁であり、その逆もまた然りとなってしまう。しかるに、核となる共同の価値基準がなければ、互いを尊重することはできない。だから社会に必要なのは、他人に価値を過度に押しつけることのない、「適度な」価値のすり合わせということになる。こうした「程度の度合い」の重視は、必要に応じて原則の抽象度を操作するというプラグマティズムの一面をもつ。加藤は「それを考えて、なんの役に立つのか」という視点をもっていた。自らの原則を批判的に再検討し、必要に応じて修正を加えることをため

らわなかった。

ところで、意外に思われるかもしれないが、多様な側面から日本文化の特徴を分析した加藤は、「日本人の本質」を定義することを注意深く避けてきた。晩年の『日本文化における時間と空間』でも、「日本精神史（または思想史）の本質的な特徴」を「現在主義」という言葉でまとめているのは、出来事に対する日本人の反応の型であって、そこから「日本人とは現在しか見ない民族である」というような言い方で結論づけることはしない。それは、おそらく自分自身を含めた少数の原則主義的な日本人はそうではなかったからであり、自分のような人間も含めて日本人という集団は成立しているという事実を尊重したからではないだろうか。

加藤周一は「さしあたりの原則主義者」という分かりにくい立場を貫くことで、思想家としての彼自身の立場を表現した。それは特定の思想に忠誠を誓わず、状況に即した最良の道を考え続けることを信条とする、知的誠実さのしるしだった、というのが、私のさしあたりの結論である。

(いわつ こう 金沢大学人間社会研究域教授)

